

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第265号 2020年12月4日

OCHADAI GAZETTE Winter, 2020



コロナ禍を越えて新しい時代へ

CONTENTS

TOPICS

学長からのメッセージ 1-2
コロナ禍を乗り越えて

～ 学ぶ意欲のあるすべての女性のために ～

学生のアクティビティ 3-4

教員紹介 5

- 伊村 くらら先生
(基幹研究院自然科学系 講師)

卒業生紹介 6

- 生部 まゆこさん
(生活科学部 人間生活学科 生活社会科学講座 卒業)

附属学校園からのお知らせ 7-8

キャンパス点描 9-10

- 田野瀬文部科学副大臣がお茶の水女子大学を訪問
～理工系女性人材育成の教育現場を視察～
- 新フンボルト入試プレゼминаールを開催しました
- OCHADAI WEB OPEN CAMPUS を開催しました



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

コロナ禍を 乗り越えて

～ 学ぶ意欲のあるすべての女性のために ～

昨年12月に、中国武漢市で新型肺炎が発生したとの報告があったから、1年近くが過ぎました。報告後、瞬く間に世界中に拡大した新型コロナウイルス感染は、未だ沈静化する兆しを見せず、その結果、人々の様々な活動が制限され、これまで当たり前とされていた普通の生活が奪われました。そんな中で、学生や教職員の方々は、不安の中で不自由な毎日を過ごされていることと思います。特に、新入生の皆さまは、夢を持って入学された大学で、思うように対面授業を受けられなかったり、様々な活動ができなかったり、同級生等との友情を育てることができなかったりすることに、残念な想いを抱いていらっしゃることでしょう。保護者の皆さまも、さぞご心配のことと思います。こうした事態は、第二次世界大戦の混乱の時期を除いては、大学の145年の歴史の中で初めての経験です。

大学は本来、多様な人々が共に学び、考え、議論を交わすことで、多くの智と新たな価値を生み出す場です。対面での活動は、学生の皆さまの心身の成長を促すとても大切な機会であり、教職員の方々にとっても、教育研究に新しい局面を開く機会ともなります。そういった大切な学びの機会が制限されるWith-Coronaの厳しい状況下にあっても、質の高い学びをつなぐために、オンライン授業において工夫と努力を重ねて来られた全ての学生・教職員の方々に、心からの感謝をお伝えしたいと思います。Before-Coronaの時代の学びとはかなり異質なものになるでしょうけれど、新しい時代の教育と研究の姿を構築すべくご尽力下さっている皆さまの熱意で、オンライン授業を十分に活用したハイブリッド型の教育を推進することで、これまで以上の効果を上げること、不可能ではないと思います。まだ暫くはWith-Coronaの状況であることをしっかりと認識した上で、より進化した教育と研究の在り方を探って参りましょう。

今後、お茶の水女子大学では、この困難の中で学んだ経験を活かし、オンライン授業・オンライン会議・テレワークなどを大学の活動の中に有効に取り入れつつ、対面での活動を大切に「新たな教育・研究・大学運営」を構築すべく、検討を進めます。その過程では、学生・教職員の皆さまにも、一緒に考え、ご協力頂きたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

ただ、With-Coronaの状況が続く中で、生活に困窮を来したり、心が不安定になったり、いろいろな問題を抱える方もいらっしゃると思います。何かお困りのことがありましたら、ご遠慮なく事務の窓口や保健管理センター、学生相談室などにご相談下さい。学生の皆さまへの支援金や奨学金も用意していますので、どんな時にも学びを諦めたりなさらないよう、そして、焦ることなく、感染を防ぎながら、お茶の水女子大学での学びを楽しんで頂きたいと思っております。

なお、10月1日のビデオメッセージでもお伝えしましたが、今は、十分に注意をしても、誰もが感染の可能性がある状況になっています。どうぞ、ご自身や周囲の方が感染するようなことがあっても、ご自身を責めたり、他の方を責めたりするようなことは、決してなさらないで下さい。万一そういったことがあっても、「新型コロナウイルス感染防止対策室」にご連絡・ご相談下さると共に、冷静に、最適な対処法を講じて下さい。大学は、全力を挙げて、皆さまを支援します。

皆さまの健康と安全を守ることを第一として、共にAfter-Corona時代に向けた、しなやか且つ強靱な、新しい大学創りを進めましょう。

そして、コロナ禍を乗り越え、大学が目指す理念の実現に向かって、皆さまと一緒に、さらなる努力を続けたいと考えています。





お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のある すべての女性にとって、真摯な 夢の実現の場として存在する

本学は、1875年の創立以来、日本の女子教育を先導して来ましたが、2001年に上記のミッションを掲げ、日本のみならず世界中の女性たちの学びの拠点となることを宣言しました。実際には、1903年から4年間に亘ってタイから4名の留学生受け入れたことに端を発し、世界への扉を開いて活動を続けていたのですが、国立大学の法人化を機に、特にアジア、アフリカ圏の開発途上国に注目して、女性や子ども達の教育に積極的に関与していく方針を打ち出しました。お茶の水女子大学が目指している「グローバル女性リーダーの育成」は、「世界中のすべての女性」がその資質・能力を活かして、社会を牽引する人材となることを希求しているのです。

そのミッションを具体化する実践として、2002年からアフガニスタン・イスラム共和国への女子教育支援を開始し、続いてアフリカ西部諸国での幼児教育支援にも取り組んで来ました。こうした活動を継続する中で、女性が多様な場でリーダーとして活躍できることを示し、女性の視点で世界中の人々の幸福を目指した教育や研究・開発を推進することが、私たちの大切な使命です。

年々進展するグローバル化と共に、現代社会は様々な課題を抱えるようになって来ました。そんな中で、145年にわたって教育・研究を積み重ねてきた本学の学術的資産を、社会に還元していくことがこれまで以上に求められていることを強く感じています。本学では、そうした問題解決に果敢にチャレンジできる人材としての「グローバル女性リーダー」育成のために、「グローバル女性リーダー育成研究機構」を設立し、その傘下に「グローバルリーダーシップ研究所」と「ジェンダー研究所」の二つの教育・研究機関を設置しました。女性が活躍できる裾野を広げるためには、社会の多様な場で、意思決定ができる立場にいる女性たちを増やすことが必要なのです。

また、本学の学術的資産を社会の役に立てるための研究組織として「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」を創設し、その下

に、二つの研究所を開設しました。子どもたちの心身の健全な発達を促し、生活習慣病の克服や高齢者の健康長寿をサポートするための研究を推進する「ヒューマンライフイノベーション研究所」と、教育と保育に関わる実践研究や子ども達の発達に関わる研究・教育を推進する「人間発達教育科学研究所」です。これらの組織における研究を通して、本学は、人々がその一生を通じて心身共に健康で幸せな生活を送れる社会を創ることを目指しています。

現代社会が抱える諸問題は益々複雑で多様なものになって来ますので、それらの問題を解決していくためには、特定の知識と考え方だけでは対応できなくなるでしょう。異文化を深く理解し、文系と理系が学び合い、お互いの可能性を高めることなど、「しなやか」な学びの姿勢が必要です。本学では、すべての学部・学科の垣根をできるだけ低くして、全ての学生が、文理融合のリベラルアーツやAI・データサイエンス科目を履修して、幅広い視野と教養を身に着けるための環境を構築しています。

そして本学には、学生の皆さまが将来の目標にできる多くの女性教職員の存在と、困った時に懇切丁寧に面倒を見てくれる環境があります。自由な雰囲気の中で、社会に根付いている役割意識にとらわれず、さまざまなことにチャレンジしていけることも本学の大きな魅力です。学生の皆さまには、一人ひとりの可能性を尊重し、決して「あなたにはムリ」とは言わないお茶の水女子大学の学風の中で、充実した学生生活を送って頂きたいと願っています。

室伏 きみ子学長からのビデオ
メッセージはこちらの QRコードから
ご覧ください ▶



学長からのメッセージ

学生のアクティビティ

第71回 徽音祭「りん」を開催!



11月7日(土)、8日(日)に
第71回 徽音祭「りん」を開催いたしました。
本年度は、初の試みとして
オンラインでの開催とさせていただきました。
これまでのプログラムをオンラインでも
楽しんでいただけるようリニューアルし、
子どもから大人まで幅広く楽しんで
いただけるような徽音祭といたしました。



本年度のテーマ「りん」

「りん」
お茶大生の「凛」とした美しさが響く。
共に歩む「倫」の声が呼ぶ。
人々が集い、「輪」の足音が広がる。
その全てが融合し、「鈴」の音のような
ハーモニーが生まれる。
今年で71回目を迎える徽音祭は、
「徽音」の名を冠するにふさわしい、
新たな音を奏でます。
さあ、この音、届け。

輪

人々が集い、広がる
「輪」の足音

融合して生まれる
「鈴」の音のハーモニー

鈴

切磋琢磨し共に歩む
「倫」の声

倫

凛 お茶大生の
「凛」とした美しさの響き





～プログラム(抜粋)～

◆オチャリーグ

お客様参加型のクイズ大会として、様々な分野の2択クイズにチャレンジ。

◆模擬授業

お茶大の先生による模擬授業。お茶大生になった気分になれる人気企画。

◆受験生相談室

現役お茶大生が勉強面や学校生活について受験生からの質問にお答えします。

◆学術企画

お茶大有志が身近なテーマからじっくり考えるようなテーマまで、自らの学びを発信します。

◆オンラインキャンパスツアー

学内で撮影した写真をご覧いただきながら、お茶大生のガイドが各施設について紹介。

◆グランドフィナーレ

2日間にわたる微音祭を締めくくる企画として、参加団体コンテストの結果発表、水コン・微音座の歌姫のグランプリのお披露目などを開催。



学生のアクティビティ

教員紹介

複数の視点や幅広い興味を
持ち合わせることは、異端的な
ものではなく強みになりうる

今回は、基幹研究院自然科学系講師の伊村くらら先生をご紹介します。伊村先生のご所属は、学部では理学部化学科、大学院では理学専攻化学・生物化学コースです。

Imura Clara
伊村 くらら

R1 ご出身、ご経歴などについて教えてください。

出身地は北海道札幌市です。土地柄に加えて多少おらかな時代だったというのがあります。趣味や課外活動などで好き勝手に過ごした子供だったと思います。東京理科大学に進学した後は、そのまま博士後期課程まで進んで学位を取得しています。さらに1年間を日本学術振興会特別研究員というポジションで過ごした後、中央大学で助教として教育と研究にあたりました。お茶大には2017年に着任し、今年で4年目になります。

R2 先生のご専門の研究領域のお話を聞かせてください。

これまでに扱ってきた研究対象を挙げると、ゲルやエマルションといったソフトマターから無機物の金属ナノ粒子まで、とても多岐におよびます。色々な研究テーマに手を出してきた格好になるのですが、いずれも根幹となる専門領域は「界面化学」という分野です。界面とは、水と油のように混じり合わない異なる物同士が接している面のことを指します。例えば、金属のナノ粒子はサイズをとて小さく整えた金属の粒なのですが、その界面の総面積は、同質量の金属結晶の塊と比べて非常に大きくなっています。そのため、先進のナノ材料科学の世界では、界面の状態を考えることも肝要となってくるわけです。水と油を振り混ぜてもいずれは二層に分かれて分離するように、本来混ざりあわないものを微細な粒にす

ると不安定でいずれは凝集してしまいます。この状態を保たせるには界面に何らかの工夫が必要です。洗剤などでも知られる界面活性剤は、そういった微小な物質の表面の性質を変えて操る力を持っています。その他にも界面活性剤は、溶液中で自発的に分子が集まり大きな会合体としてふるまったり、ナノ物質を運搬する働きをしたりと何通りにも働くことが可能です。現在の研究では貴金属ナノ粒子を自在に集めたり移動させたりする制御手法の開発にフォーカスしていますが、どこにでも「界面」の化学は広がっていますのでこれからも新しいチャレンジをしていきたいと考えています。

R3 先生が現在のご研究を専門にするようになった経緯を教えてください。

中学や高校の頃まで遡ると、化学と同じくそれ以上に物理にも興味を持っていました。化学の研究者ならばずっと化学一筋だろうと思われるかもしれませんが、私自身は寄り道をしながら今に至っています。実際に研究ともなると、大学受験科目のように分野や領域の明確な線引きはほぼありません。例えば私の研究分野とも関わりのある材料科学の世界は、化学以外にも物理や生命科学など様々な分野の研究者が集まっています。界面で起こる現象も、化学の視点から、物理の視点から、様々なアプローチすることが可能です。大学や大学院で物理化学や化学工学を学ぶうちに、界面化学を武器にしてナノ材料を作り上げることに興味湧いてきました。複数の視点や幅広い興味を持ち合わせることは、異端的

なものではなく強みになりうると思っていますし、大学時代にそういった懐の深い分野に出会えたことが幸運であったかなと感じています。

R4 お茶大の印象やお茶大生に向けてのメッセージをお聞かせください。

少人数で落ち着いた環境の学び舎と言われますが、まさにその通りだと思います。それに加えて「お茶の水」というべき凛とした雰囲気も感じられます。互いを認め合いながら自身にも誇りを持っている様子は、学生の皆さんのふるまいにもあらわれています。こうした雰囲気はやはりお茶大の歴史の中で培われてきたものでしょうし、この先も失われて欲しくない大きな財産です。

これからを担う皆さんには、お茶大の先人がそうであったように、熱意をもって物事に挑戦し新しい価値観を切り拓いていくことを望んでいます。多少尖っていても、周囲を少し驚かせても良いと思います。自分ならではのものを見つけられれば、是非それを誇りに思ってもらいたいです。何に取り組むべきかというのは、学びや出会いをヒントにしながら自分自身で見つけ出して欲しいと思います。コロナ禍で見え感じたことも、一つの思考指針となりうるでしょう。不自由さがフォーカスされがちな昨今ですが、若い皆さんの中には可能性が十分に眠っていますから、知らず知らずのうちにリミットをかけてしまうのは勿体ないことです。皆さんの挑戦を後押しできる学び舎でありたいと思っています。

文責：基幹研究院自然科学系教授
森 義仁

卒業生紹介

Syobu Mayuko 生部 まゆこ

所属：長崎県産業労働部
(公益財団法人 長崎県
産業振興財団 派遣)

出身：長崎県

2005年3月

お茶の水女子大学 生活科学部
人間生活学科 生活社会科学講座 卒業

2005年4月～2013年12月

金融業に従事

2014年4月

長崎県入庁 産業労働部産業振興課に所属

2017年4月

公益財団法人 長崎県産業振興財団(派遣)
企業誘致推進本部に所属

「給料半分、豊かさ倍増」金融業から 公務員へ、地元県庁への転職。

32歳になる春、大学時代から13年過ごした東京を離れ、地元へUターン、長崎県庁へ入庁しました。転職は迷いに迷いました。何せお給料は転職前の半分以上!内定受諾前に人事課へ給与交渉に出向き、『条例で決まっています』と言われたときはビックリしましたが、入庁後に『給与交渉した人なんて初めて見た』と逆にビックリされました。そんな私を受け入れてくれた長崎県庁の度量の広さに、とても感謝しています。

給料半分、というだけでなく、仕事で扱うお金の単位も大きく変わりそうで、果たして県の仕事にやりがいがあるのか、そもそも“公務員”が自分に向いているのか、悩みました。最後は『やらなかった後悔より、やった反省』という気持ちで転職、結果、上司や同僚、仕事に恵まれ、本当にやりがいのある、エキサイティングな体験をさせてもらっています。給料は半分になったけれど、人生の豊かさは倍になった、と心から思っています。

地方都市『長崎』のリアル

入庁して最初の仕事は、伝統工芸や食品産業の振興、これが良かった。陶磁器の会合に初めて出席した時です。県担当者が『2・3年後のビジョンをお聞かせ頂きたい』と質問した際、産地のおじちゃん顔が真っ赤にして『俺たちは先祖代々400年以上、この仕事をやってきた。50年後、100年後のビジョンならまだしも、2・3年後みたいなくだらぬ質問をするな!』と一喝したのです。金融という、“1年後”“半年後”“明日”のお金を稼ぐ世界からやってきた私には、カルチャーショック以外



職場の上司・
同僚たちと

のなにものでもなく、最初は『このおじちゃん、何言ってんだ』と思いましたが、おかげで興味がわいて、どっぷり沼にハマりました。どの地域にも、伝統的につくられたり守られたりしてきた技やモノが必ずあって、その背景にはその土地ならではの風土や人間らしさがあふれている。食品産業も同様で、地域ならではの美味しいものを沢山の人の口に食べてもらいたい、そうした産地の気持ちを消費地に届けるお手伝いをする仕事を通じて、扱う金額の桁が変わろうが、給料が半分になろうが、転職しなければ一生携われなかった『50年後、100年後を描く仕事』『自分のふるさとのためになる仕事』をしているんだと、心底思いました。

そして4年前から、県の外郭団体に派遣となり、企業誘致に勤しんでいます。当初は『また営業やんのかよ』と思ったのですが、これが最高に楽しい。なんせ、売りのものは地元“長崎”そのもの。長崎の“リアル”を企業ごとに切り口を変えてお伝えし、投資してもらい、一緒に長崎を良くしてもらおう。特にこの1～2年、AIやIoT分野の研究開発拠点として、大手企業に相次いで長崎を選んで頂く、その過程に携わらせてもらいました。富士フィルムソフトウェア(株)、京セラコミュニケーションシステム(株)、(株)デンソーウェーブ(株)ゼンリン、まだまだあります。彼らが最先端技術を駆使し、自社技術に更に磨きをかける『研究開発拠点』として長崎を選び、首都圏と同様の条件で人材を採用し、県内教育機関や地元企業との連携を進め、新しいビジネスを長崎で生み出してくださっています。長崎は今、新幹線やIR誘致、MICEやスタジアムを軸とした複合施設の開発など、大型プロジェクトが次々と控えており、まさに100年に一度の大きな変革期を迎えています。そうした重要な節目に、素晴らしい技術や実績を持つ企業が続々と長崎に集まっている。これはきっと、何かのご縁と思っています。

これからの課題は、『地方都市・長崎』のイメージを変えて

いくこと。長崎の新しくて正しい『リアル』を発信し、大都市だろうとそうでなかろうと最先端の研究開発ができる、故郷で暮らしながら世界や日本の経済を担う大きな仕事にチャレンジできることを、お伝えしていきたいと思っています。

学生へのメッセージ

できるだけ速くに、できるだけ長く、『一人で』出かけてください。いつもそばにいる誰かと出かけると、たとえ海外であってもそこはずっと『小さな日本』ですが、一人で行くとそこはまさに異国、考え方も生き方も人それぞれだと、はっきり見えてきます。こうあるべき、こうしなければならぬ、私たちはいつも“常識”にとらわれていますが、それは自身の思い込みで過ぎないと気づかれます。『若い時は、時間と体力はあるが金がない、働き始めると体力と金はあるが時間がない、年をとると金と時間はあるが体力がない、全部そろってるのは今しかない』これは転職前の無職期間、海外へ一人旅に出る前に父が言ってくれた言葉です。COVID-19が収束したら、すぐにパスポートをもって、留学や一人旅に出かけてください。

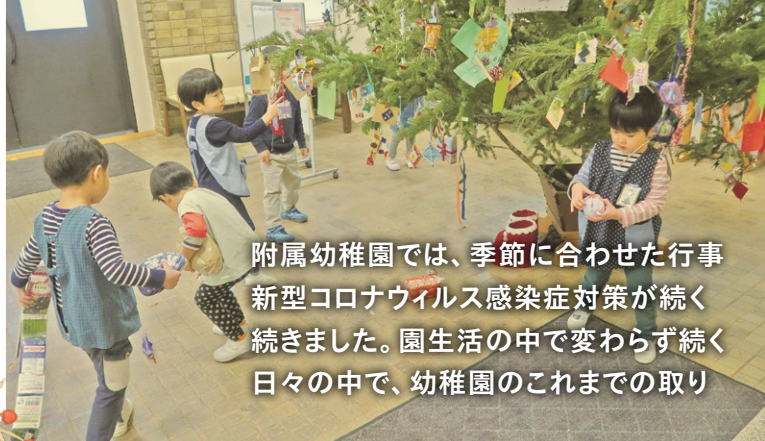
担当：基幹研究院自然科学系教授 赤松 利恵



わたしのオフタイム

年に1度は海外へ、1週間程度ですが一人旅に出かけています。旅に出る前の準備が肝心で、訪問する国の歴史や風土、英雄について調べて出かけます。狭くなった視野を開放する、良い機会となっています。

附属学校園からの お知らせ ～附属幼稚園便り～



附属幼稚園では、季節に合わせた行事
新型コロナウイルス感染症対策が続く
続きました。園生活の中で変わらず続く
日々の中で、幼稚園のこれまでの取り

教員作の「影絵」

幼稚園では子どもたちに向けて、教師が実際に演じて見せることを大切にしています。影絵の脚本は、複数の絵本等を参考にして作成し、白ボール紙で人形を作り、音楽は様々なジャンルから選択し、声は吹き込み、教員の手作りで演じます。

「影絵」上演が始まったきっかけは、当時の先生が研修で学んだものを導入されたようです。現在の手法は、改良した第2シリーズですが、既に30年以上続いていて、2学期の終業式（12月下旬）に披露しています。背景はOHPを使い、声はカセットテープに吹き込むので、デジタルなやり方に移行していく必要を感じています。人形づくりから、舞台裏の人形操作まで自作自演で、立つ・座る・歩く等の人形の動きやモノの受け渡しには技

を要します。例えば一体の人形を2人で操作する時など、練習を重ねる中で、教員間には呼吸を合わせる一体感が生まれます。

遊戯室の電気が消されると少し怖がる子どもがいますが、「影絵」の動きやストーリーに、次第に引き込まれていきます。幕間の暗転時は、賑やかになることもありますが、次の場面が始まると、ずっと静かになり、モノの受け渡し場面では、息を詰めて見守り、うまく進むと安堵のため息が聞こえることもあり、有り難いお客様です。



影絵「ジャックとマメの木」▶▶

誕生会の 「語り聞かせ」

昭和56年4月から61年3月迄、園長ご在任でいらした外山滋比古先生が、7月に亡くなられました。外山先生は毎月の誕生会に、園長先生のお話として、短いお話を始められたそうです。子どもたちが語



り聞かせの話しに耳を傾けて、じっくり聞く姿がありました。英文学がご専門でありながら日本語教育の重要性についても多くのご著書で語っていらっしゃいます。当時のPTA会報『つぼみ』誌に書かれた文章は、今、拝読しても深い示唆に富んでいます。

本園の創立140年記念誌96頁の「雨傘園長」もどうぞこの機会にご再読ください。



▲PTAつぼみ誌表紙

つながりの中で 保育が豊かになる

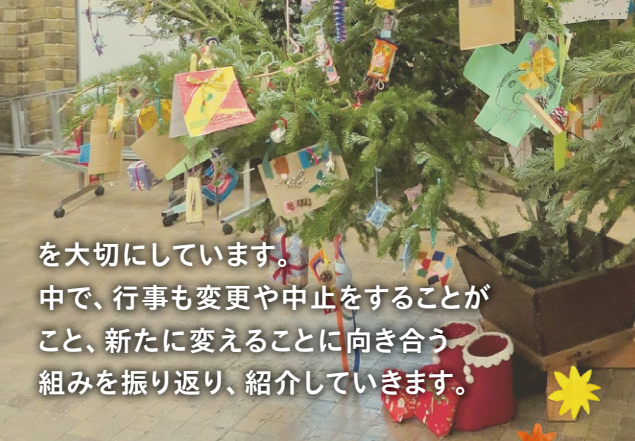
「影絵を改良版で作ろう」という案が出た際にも、園長の外山先生が「どんどん新しいこともやってみるとよい」と背中を押してくださったそうです。幼稚園は比較的規模の小さい教員集団だけに、大学教授とご兼任の園長先生の発想や発言で、小さな大きな変革が生まれてきました。

現在は、理系女性教育開発共同機構の取組で保護者向け研修の機会があり、現園長、森義仁先生が化学のご専門の立場か

ら講師を務めてくださっています。保護者の経験が豊かになることは、子育てに活かされて、理系好きの子どもが増えて欲しいという願いが込められた企画です。



▲理系女性教育開発共同機構
サイエンス研修会の様子

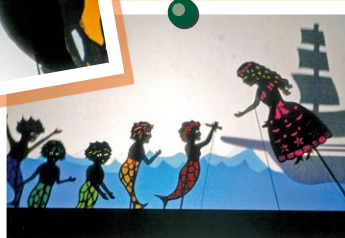


を大切にしています。

中で、行事も変更や中止をすることが
こと、新たに变えることに向き合う
組みを振り返り、紹介していきます。



◀▼影絵「にんぎょひめ」



▲外山滋比古先生「誕生会」でのお話

新たな
生活の中で

幼児期の生活で、密を避け、
直接触れ合うことを避けること
というのは根本的に難しく、新しい
生活様式と言われても戸惑
うことが多くありました。それ

でも時差登園、分散登園等の対応をしたことで、一
人ひとりの子ども、保護者とより丁寧に会うことが
できたり、今まで当たり前に行ってきたことを変えたら、
新たに気づくことがあったりしました。また保護
者のご理解や共感的な対応に、教職員が励まされる
ことも度々ありました。

今、できることを大切にする前向きな姿勢で、でき
たことを喜び感謝しながら、子どもたちとの日々を過
ごしています。

附属学校園での出来事 (2020年10月～12月)

【いずみナーサリー】

10月

- 避難訓練 (地震)
- 個人面談

11月

- 在園児健康診断
- 避難訓練

12月

- クリスマスあそび
- 避難訓練

【附属幼稚園】

10月

- こどもうんどうかい
- 5歳児 親子で遊ぶ日
- 誕生会 (9・10月)
- 避難訓練
- 5歳児 さつまいも掘り
- 4歳児 親子で遊ぶ日
- 3歳児 親子で遊ぶ日

11月

- 避難訓練
- 創立記念の集い

12月

- 終業式

【附属小学校】

10月

- 衣がえ
- 避難訓練
- 教育実習、栄養教育実習
- 防災訓練 (教職員・5年)
- サツマイモ掘り (3年)
- 土曜登校
- ミニ運動会 (1・6年)

11月

- 引き取り訓練 (1年)、ANPIC訓練 (2～6年)
- スポーツ大会 (5年)
- いじめ防止の講演会
- 保護者会
- 土曜登校

12月

- 保護者会
- 終業式

【附属中学校】

10月

- 1、2、3年中間テスト
- 後期時間割開始
- 生徒会選挙
- 健康診断
- Web学校説明会

11月

- 任命式
- 2、3年期末テスト
- 芸能鑑賞教室
- 創立記念日

12月

- 1年期末テスト
- 保護者会
- 2学期終業式

【附属高校】

10月

- 2学期中間考査
- 身体計測
- 台北一女とのオンラインミーティング
- Web学校説明会
- 3年学力テスト

11月

- 2年学力テスト
- 避難訓練 (地震)
- お茶大・筑波大附属高校合同キャリアカフェ
- 健康診断
- 3年学力テスト
- オンライン自治会総会・選挙
- 校長による個別進路相談
- 1年 Mind the Gap オンラインプログラム (Google 社主催)
- 創立記念日

12月

- 2学期期末考査
- 東工大ウィンターレクチャー
- 輝鏡祭代替プログラム
- 終業式

附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

田野瀬文部科学副大臣がお茶の水女子大学を訪問

～理工系女性人材育成の教育現場を視察～

田野瀬太道文部科学副大臣が、2020年10月9日午後、視察のためお茶の水女子大学を訪れました。室伏きみ子学長から、本学が推進する理工系女性人材の育成戦略について概要を説明し、現在検討中の工学系新学部構想や女性の活躍推進を支える学内組織体制等について活発な意見交換を行いました。

その後、理学部及び生活科学部をご案内し、基幹研究院自然科学系工藤和恵准教授から、理学部情報科学科における先進的な量子コンピューティング分野の教育について、同自然科学系 藤原葉子教授・副学長から、生活科学部食物栄養学科における基礎栄養学の研究と教育について、同自然科学系 長澤夏子准教授から、生活科学部人間・環境科学科における人間工学・環境心理アプローチによる建築の実践教育について説明を行いました。田野瀬文部科学副大臣からは、理工系分野への進路選択のきっかけなどの質問があり、学生との意見交換を通じて、様々な社会の課題にとりくみ、理工学の専門性を深める本学の教育の現状をお伝えいたしました。

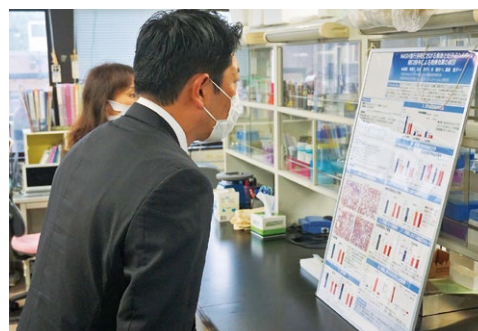


室伏きみ子学長らとの意見交換

お茶の水女子大学では、今後も、初等中等教育における女性の理工系への進路選択を支援する活動をはじめ、理工系分野における女性の活躍を助け、理工系女性リーダーの育成という目標に向けて尽力して参ります。



熱心に耳を傾ける
田野瀬副大臣

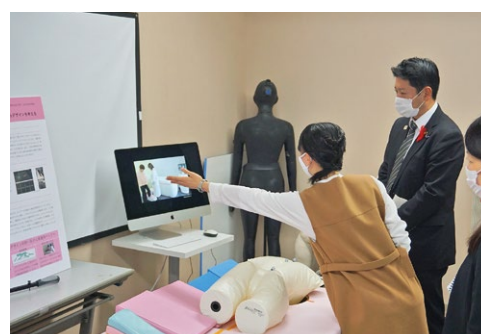


食品中に含まれる成分と生活習慣病予防との関連について、培養細胞や動物を使って研究している
藤原葉子教授



量子コンピューティング分野を将来牽引する女性人材の育成を目指す
工藤和恵准教授

長澤夏子准教授が開発に参加した痛みや被曝のない乳がん検査装置について学生から説明を受ける田野瀬副大臣



OCHADAI WEB OPEN CAMPUS を開催しました

例年7月に開催をしていたオープンキャンパスは、新型コロナウイルス感染拡大防止のために開催中止となりましたが、オンラインによる「OCHADAI WEB OPEN CAMPUS」を2020年9月12日(土)から10月11日(日)の約1ヶ月間に渡って開催いたしました。

「OCHADAI WEB OPEN CAMPUS」では、模擬講義や学科・講座・コース紹介など、オンデマンド型のコンテンツを大学HPの特設サイトから配信す

るとともに、オンライン上での学科・講座・コース別の説明会や在学生によるグループ相談会、新フンボルト入試合格者座談会などが開催されました。

従来とは異なるオンラインでの開催となりましたが、約1,200名以上の高校生・受験生の方々にご参加をいただくことで、お茶大の魅力を十分にお伝えすることができました。

新フンボルト入試プレゼミナールを 開催しました

感染症拡大に世界中が悩まされておりますが、今年も9月26日(土)に新フンボルト入試の第1次選考としてのプレゼミナールを無事に開催することができました。このプレゼミナールは、受講者を総合型選抜(旧AO入試)受験生に限定するのではなく、広く高校2・3年生にも開放して行う点に大きな特徴のひとつがあります。

当日は、感染症拡大防止に十分な配慮を行った上で、文系分野から6つ、理系分野は3つ、計9つの多彩なセミナーを開講しました。今年度からは理系学科受験生にはプレゼミナール受講を必須としないこととしたので、理系セミナーの開講数は昨年よりも減りましたが、すべてのセミナーで担当教員が熱のこもった授業を行って、学問の世界をライブで体験してもらいました。また受験生以外の高校2・3年生を対象とした図書館情報検索レクチャー、理学部生物学科大学院生による研究ポスター発表・自主研究課題相談会も開催し、これらのプログラムも含め受験生131名を含む総勢273名もの熱意ある高校生の参加を得ることができました。事後アンケートでも、90%の方からセミナーに「とても満足」と回答いただけました。

引き続き、10月17日(土)・18日(日)には文系学科の第2次選考としての図書館入試を実施いたしました。2日間という長時間にわたる試験にもかかわらず、多くの受験生がこの入試にチャレンジし、意欲的に取り組んでくれました。こちらのアンケートでは、なんとすべての方から図書館入試に挑んだことが今後の勉学にとって「有益だった」と回答いただきました。

従来の入試では、大学が受験生を一方的に選ぶだけのもの、受験生にとっては合格がすべて、という性格が強かったと思います。それに対して、この新フンボルト入試は、(誤解を恐れずに言えば)「合格にかかわらず」何かを得られる入試、高校生に大学での学びとはどういうものであるかを垣間見てもらい、その上でぜひお茶大で学びたいと強く思ってもらえる(お茶大を「選んでもらう」)入試にしたいと考えています。

今年度から新フンボルト入試は文系学科と理系学科で分割実施することとなり、理系学科の第2次選考としての実験室入試は、11月28日に実施され、12月10日に合格発表を迎えます。来年度以降も、多くの意欲的な高校生が本入試にチャレンジしてくれることを願っています。



セミナー(文系)
の様子



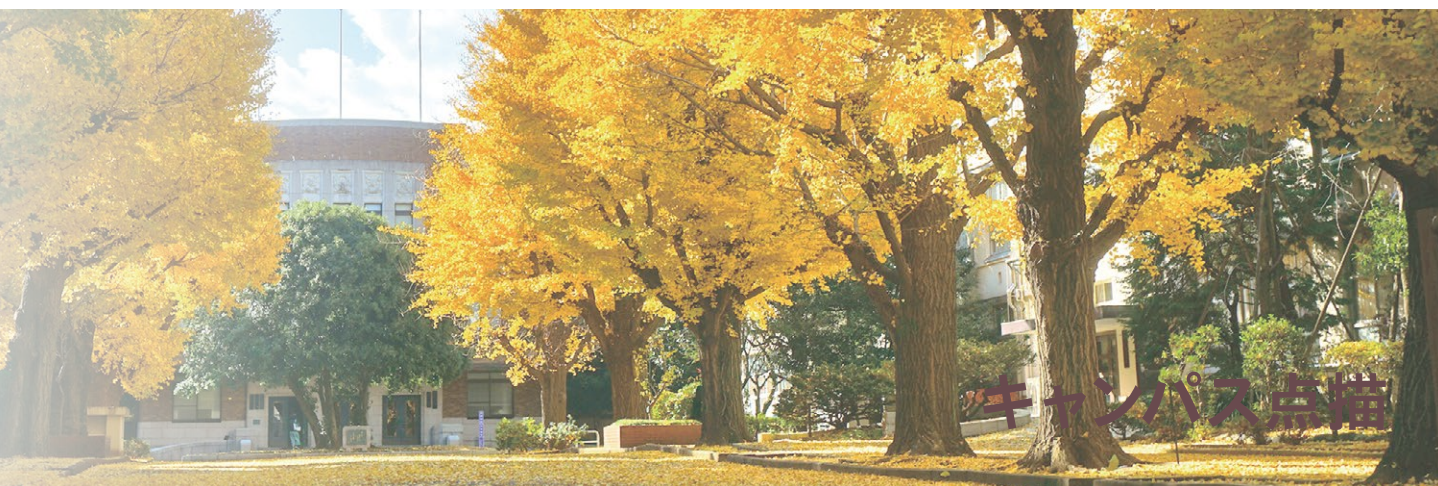
図書館入試に備えて
書架を見学する様子



生物学科による自主
研究課題相談会の様子



セミナー(理系)
の様子





写真：写真部ほか

お茶の水女子大学学報 第265号

▽発行日:2020年12月4日

▽発行:国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

企画戦略課広報企画担当

電話 : 03-5978-5105

FAX : 03-5978-5545

E-mail: info@cc.ocha.ac.jp

URL : <http://www.ocha.ac.jp/>

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。